

# 近代気象学の先駆者・中村精男（下）

## —吉田松陰と松下村塾の影響を踏まえて—

牛見 真博\*

### Kiyoo Nakamura, Pioneer of Modern Meteorology; the second half : Based on the Influence of Shoin Yoshida and Shoukason-juku Academy

Masahiro USHIMI

#### Abstract

Kiyoo Nakamura used to be a student at Shoukason-juku academy (private school run by Shoin Yoshida), and then made a decision to major in physics and meteorology. He served as the director of the Central Meteorological Observatory (Japan Meteorological Agency in the present day) and devoted himself to establishing the modern meteorology. In addition, he was also known as one of the founders of the current Tokyo University of Science. I'd like to the explanation about him as a meteorologist.

**Keywords** : Kiyoo Nakamura, Meteorology, Shoin Yoshida, Shoukason-juku  
キーワード : 中村精男, 気象学, 吉田松陰, 松下村塾

#### 1 はじめに

中村精男（1855-1930）は、吉田松陰（1830-1859）亡き後の松下村塾に学んで物理学、さらに気象学の道に進み、中央気象台の第三代台長などを務めるとともに、わが国の気象学分野で初めて理学博士号を授与された人物である。また、東京物理学講習所（東京理科大学の前身）の設立に尽力した一人でもあり、後身の東京物理学校では明治29年（1896）2月から昭和5年（1930）1月に亡くなるまで、じつに34年近くの長きにわたり校長を務めた。

後半部となる本稿では、気象学者としての中村精男の歩みについて見ていきたい。

#### 2 気象学の道へ

気象は海事と不可分である。試みに、中村が学生であった当時、わが国の気象学分野で刊行されていた一書として、『颶風學要』を取り上げてみる。

同書は、明治2年（1869）にワザロ（*Wazaro* : 生没年不詳）が、船が海上で暴風を避けることを主眼に台風の諸知識について編述したものを、近藤真琴（1831-1886）が翻訳し、明治7年（1874）に海軍兵学寮から刊行された

ものである<sup>注1</sup>。同書の総論には、次のようにある。

晴雨学のうちにて航海家にもつとも大切なるものは颶風の理なり。航海家此理に通ずれば風の方位と天氣の徴候とを見て颶風のゆくか風の強弱順逆のところを明らか<sup>に</sup>知る事を得て、以て危ふきをのがるゝのみならず。又颶風の力をかりて其航行に便にする事を得べし<sup>1)</sup>

近代以降、わが国でも西洋の科学的知識の移入にはじまり、学問としての気象学が誕生するが、現実の当面の大きな目的は、暴風の発生を予知し航海の安全に資することであった。

ここでは主に、気象庁編『気象学百年史』（第一法規出版、1975年）や、堤之智『気象学と気象予報の発達史』（丸善出版、2018年）といった先行研究に拠りながら、当時の気象学をめぐる動向の上に、気象学の専門家として歩みを進めていく中村の動向を重ねながら追ってきたい。

明治8年（1875）6月1日、内務省地理寮構内の東京気象台において気象観測（同月5日から毎日3回）と地震観測（明治17年12月1日から全国的な震度観測）が開

\* 一般科目

始された。これをもって現在の気象庁の設立とされている。

明治10年1月には、内務省は天気予報、暴風警報の発表を行う方針を掲げ、時の内務卿であった大久保利通(1830-1878)が直轄測候所の設立を計画した。当時、内務大書記官であった品川弥二郎もこれに参画し、設立に尽力している。

明治12年(1879)12月、東京大学理学部仏語物理学科を卒業した中村は、内務省地理局測量課に奉職(准判任御用掛)。この時、仏語物理学科以来の盟友和田雄治(1859-1918)と同課に奉職し、測地、天測を担当した<sup>2)</sup>。この奉職には、吉田松陰の門下で、明治政府の要職にあった12歳年上の品川弥二郎の推挙があった。ちなみに、品川は勝津兼亮の長女と、中村は三女とそれぞれ結婚しており義兄弟の間柄である。また勝地の母は山県有朋の姉にあたり、こちらも親戚関係にある<sup>3)</sup>。

中村は、翌13年(1880)の8月3日から5日まで、富士山頂で最初の気象観測に従事している。東京大学理学部教授のメンデンホール(Mendenhall: 1841-1924)が山頂で重力測定を行った際、当時、地理局測量課にいた中村精男、和田雄治と、理学部生の隈本有尚、藤沢力とで気象観測を行った<sup>4)</sup>。

明治14年(1881)に内務卿となった吉田松陰門下の山田顕義(1844-1892)は、翌15年にはドイツのクニッピング(Knipping: 1844-1922)を内務省に雇い入れ、暴風警報に関する任にあたらせた。

明治16年(1883)2月16日、東京気象台で初めての天気図が作成され、3月1日からは毎日印刷発行された。さらに、同年5月26日はわが国で初めて暴風警報が発表された。この警報により神戸では早速、船舶が出航を見合わせ危険の回避につながった。

この前後、政府および東京気象台を中心に、高額な電報費用の気象観測目的における無料化、全国各地における観測時刻の統一、気象観測におけるメートル法と摂氏の採用と普及、気象観測手法の統一などの諸課題に取り組み、一層の組織整備や観測拡充に進む契機となった。

明治17年(1884)6月1日からは、1日3回の全国の天気予報の発表が開始された<sup>注2)</sup>。後に第4代中央気象台長を務めた岡田武松(1874-1956)による次の言は、当時の実情と苦心を伝えるもので興味深い。

天気予報を出すのは暴風警報を出すよりもむずかしいものだから、クニッピング氏は暫らく様子を見ておられたのであろう。そうこうするうちに、予報はどうしたんだろうなんていう声が高くなったので、同氏も思い切って出すよう

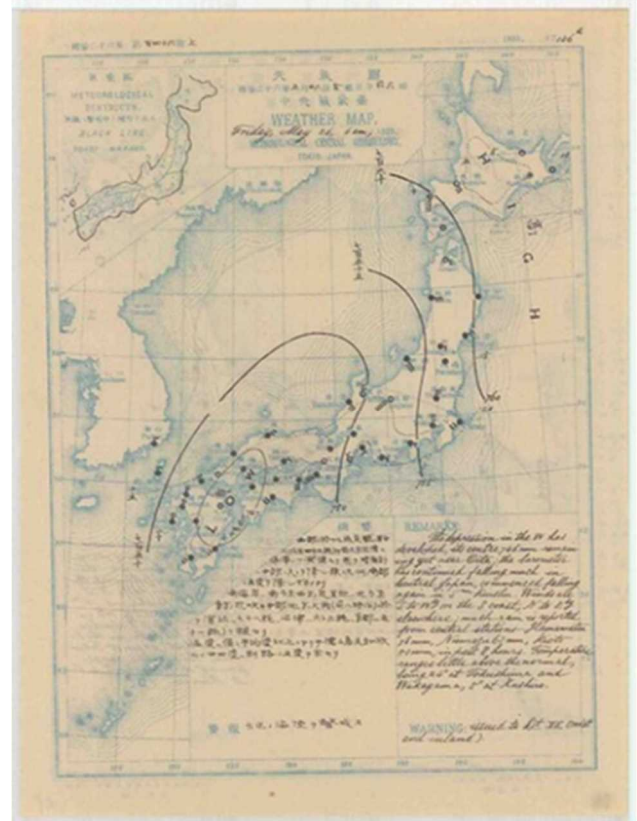


図1 我が国初の暴風警報発出当日(明治16年5月26日)の天気図(原典:気象庁「天気図」、加工:国立情報学研究所「デジタル台風」)

になった。しかるに案の定、不中がたびたびあって評判がよくなかった。天気予報は簡単に当るものだと信じている世間も悪いが、無理やりに出す方も善くないともいえないこともない。しかし創業時代には、こんな無理をしなければ、事業を起こせないのだから仕方がない<sup>5)</sup>。

当時のわが国の気象事業推進の実現には、クニッピングの存在を欠くことはできない。当初から彼のもとで気象観測に従事していた中村は、次のように印象的に語っている。

「クニッピング」氏ハ非常ノ勤勉家ニシテ夙夜此ノ準備ニ没頭シ、出テハ全国ヲ巡回シテ新設スベキ測候所ノ位置ヲ撰定シ、入テハ気象電報ノ符号、天気図ノ様式等ヲ作製シ、1ヶ年内ニ諸準備ヲ完成シ、事業開始後モ毎日3回ノ天気図ハ必ズ自ラ調製シテ、予報、警報ヲ発シ病氣又ハ公私ノ宴会等ノ場合ニ於テモ天気図調成ノ時刻ニハ必ズ事務所ニ出頭シ、在職中殆ド欠勤シタコト無シ<sup>注3)</sup>。

天気図の作成については、前掲『気象学と気象予報の発達史』の中でも次のように記されている。

天気図は、当初全国21地点の測候所からの電

報をもとに等圧線、等温線を描く作業はクニッピンが一人で行い、天気図に天気概況を英文で記述した。残りは日本人の担当者が作業し、最終的に印刷する際には天気図の等圧線や等温線は画家が記入し、文字は書家が清書した。英文の天気概況は和訳され、そのときの訳語として作られた低気圧などの言葉は今日でも使われている<sup>9)</sup>。

こうした初期の気象事業の恩人とも言うべきクニッピンの雇い入れに尽力したのは、松陰門下の山田顕義であり、品川弥二郎であった。品川の功績については、大正4年4月の中村精男在職二十年及び還暦祝賀会の席上における和田雄治の次の談話からも窺える。

忘却してならぬ一大恩人がある事を述べたいのであります。中村博士を採用して我が気象界に入らしめたる故品川子爵が其人であります。明治12年子爵は地理局長でありまして、同年来中村博士は地理局准任御用掛を拝命されたのであります。(中略)抑々クニッピン先生を採用して我が政府に傭聘するに至りました其の斡旋人は何人でありましょうか。是亦品川子爵であります。当時子爵は内務(農商務)少輔で居られた様に覚えて居りますが、抑々少輔の黒幕に少輔御親類の中村博士が潜んでいた事も決して忘却してならぬと存じます<sup>7)</sup>

当時、内務省にいた山田顕義や品川弥二郎といった松陰直接の門下生が気象分野で熱心に尽力したことは、先にも述べた吉田松陰の海事志向の影響によるものであろう。山田顕義による尽力も、品川弥二郎による中村精男の推挙も、航海の安全と気象が不可分であることによる松陰の遺志の延長上にあつたと思われる。山田顕義は、17年には東京気象学会会長、後身の大日本気象学会でも会頭職に就いている。

中村自身は、松陰から直接の薫陶を受けたわけではないが、松陰直接の弟子で義兄でもある品川や、松陰による後継指名をうけ松下村塾を主宰した馬島甫仙らを通して、吉田松陰の遺風といったものを色濃く感じられる環境があり、吉田松陰の海事志向や遺志に導かれるように気象分野に進んだように思われる。

明治16年2月に改められた地理局の分掌では、中村は気象部の観測掛長、明治18年の組織変更では地理局第4部の測候課長を務めた<sup>8)</sup>。

### 3 ドイツ留学と気象学者としての歩み

明治19年(1886)、中村はドイツ留学に赴く。内

務省の資料には次のように見える<sup>9)</sup>。

右ノ者今般気象学研究ノ為メ私費ヲ以テ歐洲ニ渡航センコトヲ願出タリ同人ハ東京大学ニ於テ理学科ヲ卒業シ当省奉職以来専ラ気象観測ノ事ニ従ヒ頗ル勉勵セリ猶一層該事業ヲ研究セハ将来ニ望アルヘシ抑本邦従前気象学専修者ナキヲ以テ已ムヲ得ス獨国人ヲ招聘スト雖モ外人ヲ傭フハ素ヨリ得策ニ非ス早晚適当ノ人物ヲ選ヒ海外ニ留学シ該事業ヲ専修セシメサル可カラス然ルニ今幸ニ同人自カラ奮テ洋行ヲ求ム依テ其請ヲ允シ非職ト為シテ留学中月手当五拾円ヲ給セントス右閣議ヲ請フ  
明治十九年二月十八日 内務大臣伯爵山縣有朋

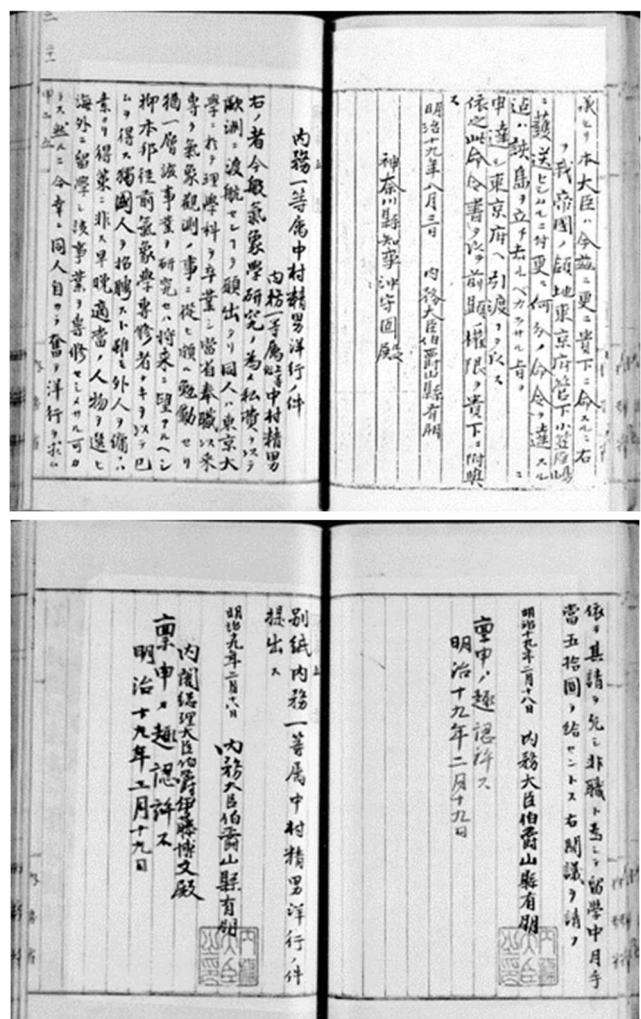


図2 「内務一等属中村精男洋行ノ件」(公文雑纂、内務省一、明治十九年第九卷、国立国会図書館蔵)

これまで我が国に「気象学専修者」がなかったために外国人の尽力を得てきたが、今後の気象分野において、日本人による発展を期する上での洋行として、中村自身の希望も踏まえ留学したことが窺える。留学先をドイツに定めたことは、それまで気象観測

事業に共に取り組んできたドイツ人のクニッピングとのつながりも大きく影響していたのであろう。

表現上は「私費留学」とあるものの、実際には今後のわが国の気象学の発展を期して送り出されたことが、毎月の「手当五拾円」からも窺える。単純な比較は難しいながらも、明治30年頃の一円が現在の二万円相当とされることから恵まれた境遇での留学であったと言えよう。

さらに中村のドイツ留学の背景には、品川弥二郎によるドイツ重視の姿勢もあったことを指摘できる。

品川は、明治3年に普仏戦争の視察から、その後、明治8年までドイツに留学した。明治14年には、桂太郎(1848-1913)、青木周蔵(1844-1914)、加藤弘之(1836-1916)、西周(1829-1897)らとともに「獨逸学協会」を、同16年には「獨逸学協会学校」(獨協大学の前身)を設立している。その開校式で委員長を務めた品川は、自らの演説の中で次のように述べている。

英学又は仏学を修むるものにして、転じて他の洋学を修めんと欲するもの鮮く、皇漢学を修めたるものにして、転じて他の洋学を修めんと欲するもの多し。是れ亦今日の勢なり。且洋学あるも皇漢の学なければ、今日の実用を為さざるの憂なきにあらず。…抑々獨逸学の我邦に必要な、今更弁を待たざる所なり。蓋し欧州學術の我邦に輸入するもの一にして足らず。而して英学なり仏学なり、既に已に大に開けたりと謂ふべし。之に反し獨逸学に至りては、医学を除くの外は、未だ大に開けたりと謂ふべからず。今より獨逸学を振張し、之をして彼の英仏諸学と共に、我国文明を資くるに至らしむることは、余請ふ諸君の助を得て之に任せん<sup>10)</sup>。

ここで述べるような品川が求める人物像は、あたかもフランス語で物理学を学び、皇漢学(国学や漢学)といった学問にも通じている中村精男の存在を思わせるようでもある。

品川は明治19年から20年にわたり、特命全権公使としてベルリンに赴いており、ちょうど中村のドイツ行きと時期が重なっていることも、品川によるドイツ行きの勧めや強い期待、後押しがあったことが推察される<sup>注4)</sup>。

留学中の中村は、ベルリン大学でベツォルト(Bezold: 1837-1907)の指導を受け気象学の研究に従事した。ベツォルトは、1885年からベルリン気象台長を務めている。また、ハンブルグのドイツ海洋気象台においてノイマヤー(Neumayer: 生没年不詳)の下で実地気象学にも従事し、明治22年(1889)3

月に帰国した。ちなみに、大正9年(1920)、神戸に海洋気象台が開設されるが、ドイツ海洋気象台を含む中村の留学がわが国の海洋気象台設立にも影響しているとされる<sup>11)</sup>。

この間、明治20年(1887)1月、東京気象台は中央気象台に改称され、荒井郁之助(1836-1909)が初代中央気象台長に就任している。中村は帰国後の明治22年(1889)4月から地理局に復職し、8月には中央気象台技師に補せられ、次いで統計課長となった。

ドイツ留学から帰国した中村は精力的に気象分野における論文を発表しており、帰国後、数年以内のものを挙げれば次のようなものがある。

- ・「快晴ト曇天トノ日ニ於ケル気圧ノ変化ニ就テ」(『気象集誌』第八年第七号、明治22年)
- ・「数日間連続セル天気ニ就テ」(『気象集誌』第八年第八号、明治22年)
- ・「東京ノ地中温度ニ就テ」(『気象集誌』第九年第一号、明治23年)
- ・「本邦ハ同緯度ノ地ニ比シテ寒キカ将タ熱キカ」(『気象集誌』第十一年第八号、明治25年)
- ・「空気ノ温度ニ及ホス海陸ノ影響」(『気象集誌』第十四年第五号、明治29年)
- ・「気温ノ一日間ニ於ケル変化ニ就テ」(『東京物理学校雑誌』第五卷、明治29年)

後に中央気象台台長を務めた岡田武松は、中村の学問について次のように述べている。

筆者は明治32年の夏から先生の示導に浴する光栄を有し爾來御永眠の数日前まで事業上や學術上何異となく御世話を戴いてみたので、折に触れて先生の研究の方面を拝察することが出来た、是は先生から別に伺つた訳でもないが、先生が気象学に対する方針は大体としては獨逸のフオン・ベツォルトや佛国のアンゴーの考に似寄つて居られた、乃ち気象学を物理学の立場から研究されたが、一方では氣候学上の研究にも没頭されたことは之を裏書きする、又他の方面では気象器械の考案に多大の興味を持たれたのは獨逸留学中にスプリングと親友であつたためと思ふ<sup>注5)</sup>。

坂野徹・塚原東吾編著『帝国日本の科学思想史』では、科学者としての中村精男は、「ルーチンの気象観測の結果を統計的に処理」し、「ヨーロッパでトレーニングされたルーチンを堅実に蓄積し、日本における気象現象を記述」したという、斯界の評価の一端が示されている<sup>12)</sup>。

また、明治22年8月1日から9月7日にかけて、

近藤久二郎と富士山頂に滞在し、気象観測を行った。従来、富士山で一ヶ月以上にわたる観測はなく、「明治二十二年富士山頂気象観測報告書」は、わが国における高山観測の元祖とされ、ハンによってドイツ語でオーストリアの学士院に報告されている<sup>13)</sup>。

同時に、気象事業の啓蒙活動にも意を注いだ。明治24年の「漁業者ノ危険ヲ減少スルコトニ就テ」(『大日本水産会報告』107)は、クニッピングによる大日本水産会での演説内容の訳文を担当したものである。その冒頭部分は、中村が気象分野に携わる上での原点が強調されているように思われる。

凡ソ海上漁業者ノ遭遇スル処ノ最大ナル危険ハ彼ノ木葉大ノ扁舟ニ乗ジ漁場ヲ逐フテ茫々タル海上ニ出タルニ際シ不意ニ暴風怒濤ニ会フ是ナリ而テ此危険ハ晴雨計ノ観測暴風警報及ビ油ニテ波濤ヲ鎮静スルコトニテ稍々減少スルコトヲ得ベシ

中村は後の自身の講演においても、

天気予報並に暴風警報は、何の為に発し又如何にして之を世人に知らしむるかと云ふに、天気予報は主として農業者の便利を謀り、暴風警報は船舶の被むるべき損害を軽減するの目的で発するのである。

と説いており<sup>14)</sup>、多くの同様な機会の中で気象事業への理解の普及に取り組んだ。

明治25年(1892)には、前年10月の濃尾地震を機に、災害の予防と地震予知方法の有無の研究、災害の軽減を目的とする「震災予防調査会」が設立され、中村精男も参画している。構成メンバーは、東京大学初代総理の加藤弘之(1836-1916)を会長として、常任委員に数学者・菊池大麓(1856-1917)、土木技術者・古市公威(1854-1934)、地質学者・小藤文次郎(1856-1936)、建築家・辰野金吾(1854-1919)、地震学者・関谷清景(1854-1896)、物理学者・田中館愛橘(1856-1952)、気象学者・中村精男(1855-1930)、物理学者・長岡半太郎(1865-1950)、土木工学者・田辺朔郎(1861-1944)、地震学者・大森房吉(1868-1923)、顧問にジョン・ミルン(1850-1913)といった面々が集った<sup>15)</sup>。同年10月には、田中館愛橘、中村精男、長岡半太郎、大森房吉の連名による「地震計調査第一報告」が提出され、さらに翌26年には、「地震学研究ニ関スル意見」<sup>16)</sup>を発表している。中村自身この後も継続的な関心はやむことなく、大正12年にも「地震は予知する事が出来るか」<sup>17)</sup>といった論考を発表している。

明治26年(1893)米国シカゴの万国博覧会に『The Climate of Japan』を出品した。これは正式な気象観

測の結果から、わが国の気候状態を英文で詳述したものであり、後の『大日本風土編』の元となった論文である。

また、この年から『気象集誌』に数回にわたり発表した「気象学ノ用語」<sup>18)</sup>は、当時のわが国における気象学分野の英和対訳がまちまちであった現状から学術上の対訳語の統一を意図し、個々の用語について具体的に示したものである。先頭に立つてこうした提言を行う中村の動向自体が、すでに気象学の第一人者として自他ともに認める存在であったことの証左となろう。

明治28年(1895)8月、41歳の時に、第2代小林一知(1835-1906)の後任として第3代中央気象台長に就任し、大正12年(1923)2月まで務めた。ちなみに、初代台長の荒井郁之助は航海術に長け、幕末には幕府の軍艦操練所教授や頭取など海軍職を務め、第2代台長の小林一知も荒井とともに軍艦操練所に出仕し、咸臨丸最後の船長を務めた人物であることなどは、海事と気象のつながりの深さをよく示している。

明治33年(1900)パリで開催された国際気象学会に参加。明治35年(1902)2月には、わが国初の気象学の論文である『大日本風土編』により理学博士の学位が授与された<sup>19)</sup>。同著は明治30年に中央気象台から刊行されており、それまでの日本各地の気象観測で得た統計資料にもとづきながら我が国の気候風土について論じている。

表1 中村精男『大日本風土編』目次

|     |            |
|-----|------------|
| 総論  |            |
| 第壹章 | 空気ノ温度      |
| (甲) | 一日中気温ノ変化   |
| (乙) | 毎月平均温度     |
| (丙) | 同温線        |
| (丁) | 温度ノ偏差      |
| (戊) | 最高最低温度及其較差 |
| (己) | 温度ノ変更      |
| (庚) | 雜項         |
| 第貳章 | 空気ノ圧力      |
| (甲) | 一日中気圧ノ変化   |
| (乙) | 一年中気圧ノ変化   |
| (丙) | 気圧ノ絶対的最低   |
| (丁) | 気圧ノ配布      |
| 第三章 | 風          |
| (甲) | 一日中風速度ノ変化  |
| (乙) | 一年中風速度ノ変化  |
| (丙) | 最大風速度      |

(丁) 方向別風ノ観測回数

#### 第四章 湿度

(甲) 一日中水蒸気ノ張力並ニ湿度ノ変化

(乙) 一年中水蒸気ノ張力並ニ湿度ノ変化

#### 第五章 雲量

(甲) 一日中雲量ノ変化

(乙) 一年中雲量ノ変化

(丙) 快晴曇天日数

(丁) 日照時間

#### 第六章 降水量

(甲) 一日中降水量ノ変化

(乙) 一年中降水量ノ変化

(丙) 全国降水量ノ配布

(丁) 豪雨

(戊) 降水回数

(己) 降水絶対確度

(庚) 数日間連続キ降水アリシ日数並ニ降水ノ無カリシ日数

#### 第七章 結論

第一図 一日中気温変化ノ図

第二図 一日中気圧変化ノ図

第三図 一年中気圧変化ノ図

第四図 一日中風速度変化ノ図

第五図 一日中湿度変化ノ図

第六図 一年中湿度変化ノ図

第七図 一日中雲量変化ノ図

第八図 一年中雲量変化ノ図

第九図 一年中雨量変化ノ図

第十図 同温線

第十一図 零度同温線南進ノ図

第十一図 零度同温線北退ノ図

第十二図 温度振幅ノ図

第十三図 温度同偏差線

第十四図 同圧線及平均風向ノ図

第十五図 降水量ノ配布

明治 41 年 (1908) 11 月、帝国学士院会員に選任され、またこの間、多くの国際学会や国際会議に参加、各国へ派遣された。明治 42 年 (1909) 7 月には、主に航空機の研究、設計開発を目的とした陸軍軍用気球研究会が創設された<sup>20)</sup>。会長は後にわが国の民間航空にも大きな貢献をした当時陸軍少将の長岡外史、そして陸・海軍以外からの委員として東京帝国大学の田中館愛橘らに加え、飛行の安全に関わる気象分野から中村も選ばれている。

大正 12 年 2 月には、28 年にわたり務めた中央気象台長を勇退した。

#### 4 おわりに

中村は、中央気象台長や東京物理学校校長をはじめ、大日本気象学会会頭、日本度量衡協会会長、日本エスプレラント学会の初代理事長などの要職も務めた。

昭和 4 年 (1929) 12 月 29 日、伝説物理学科以来の盟友中村恭平氏と将棋をさすうちに倒れ、翌 5 年 (1930) 1 月 3 日に逝去した。その三日後には、設立から参画し教育者としてほぼ半生を費やした東京物理学校での校葬が執り行われた<sup>21)</sup>。

前掲『帝国日本の科学思想史』には、科学者としての中村精男について次のように記されている。

中村の生涯から分かるのは、彼の尽力によって気象観測が国家事業として定着してきたこと、そしてそれらの統計を、海外の博覧会で立派な科学的観測の成果として、紹介できるようになったことである。中村は、明治から大正の日本で理科 (科学) 教育を推し進め、それを近代的な基準に合わせることに努力した世代であり、明治・大正期の典型的な科学官僚であった。彼は明治国家を担った長州閥の一員であり、ルーチンの気象観測の結果を統計的に処理した報告で理学博士号を得た。それが当時の日本における科学的オリジナリティだったと言うならそれもそうだろう。彼がヨーロッパに留学の経験のある啓蒙家であり、メートル法の推進やエスペランティストであったことを考えるならナショナリストと言うよりユニバーサリストであったのだが、残念ながら科学史に残るオリジナルな業績はない。日本という地域 (ローカルリティ) において、ヨーロッパでトレーニングされたルーチンを堅実に蓄積し、日本における気象現象を記述したことが業績になった。中村精男は典型的なローカル・サイエンスの実践者であった<sup>22)</sup>。

近年の斯界におけるこうした評価の一方で、改めて述べるまでもなく学問の発展には段階がある。中村精男は、わが国における近代気象学の初期の段階から参画し、わが国で初めて気象学分野の論文で理学博士号を受けるなど、近代気象学を体現する先駆者として歩み、後の岡田武松 (1874-1956) や藤原咲平 (1884-1950) といった独創的と評される気象学者を生む土台を築いた功績は揺らぐものではない。

なかには、山県有朋や品川弥二郎といった長州閥での姻戚関係が中村を押し上げたという旨の言説も見えるが<sup>注6)</sup>、そうした人的なつながりを持ち合わせたことは、むしろ中村が生涯を通じてわが国の気象

学分野の確立に向けて存分に力を発揮する上で、後押しが加わっただけのことに過ぎないであろう。

余人をもって代え難い中村の能力や人格があればこそ、28年にわたる中央気象台長や、こちらも34年近くにわたる東京物理学校長の任を果たし得たことは確かである。また70歳を過ぎてなお教壇に立ち続けたことも含め、生涯を通じて吉田松陰に私淑するとともに松下村塾出身者であることの矜持を、自らの学問と教育への強い内的動機としながら生きた人物であったように思われる。

そして中村が気象分野へ進んだ原点には、吉田松陰や松下村塾門下生による海事志向の影響があり、そこから航海の安全をはじめとする日常生活での気象事業の活用、さらには地震を含む防災・減災、航空機の安全運航の検討にまで中村が関わりをもっていく過程は、そのままわが国における近代気象学の発展と軌を一にするものであったと言えるであろう。

#### 参考文献

- 1) 復刻版『海事史料叢書』第14巻所収(成山堂書店, 1969年), 119頁。
- 2) 荒川秀俊「気象界列伝中村精男」(『気象』26, 1959年)。
- 3) 宮本盛太郎「森鷗外を巡る人々—山縣宗一・中村精男・山縣伊三郎—」(『史』, 現代史懇話会, 1999年)。
- 4) 稲葉和弘・横木修治・佐藤洋・中田晃・工藤貴彦・石森啓之・熊谷茂「富士山測候所」(『地質ニュース』591号, 2003年11月号), 志崎大策『富士山測候所物語』(成山堂書店, 2002年)参照。
- 5) 堤之智『気象学と気象予報の発達史』(丸善出版, 2018年), 161頁。岡田武松「本邦天気予報事業の今昔」(『測候時報』19, 1952年), 315頁。
- 6) 前掲『気象学と気象予報の発達史』, 159頁。
- 7) 気象庁編『気象学百年史』(第一法規出版, 1975年), 66頁。
- 8) 同上, 98頁。
- 9) 「内務一等属中村精男洋行ノ件」(公文雑纂, 内務省一, 明治十九年第九卷, 国立国会図書館蔵)。
- 10) 村田峰次郎『品川子爵伝』(大日本図書, 明治43年)。
- 11) 井上篤次郎「開港後の神戸の気象観測と海洋気象台」(『海事交通研究』66, 山県記念財団, 2017年)。
- 12) 『帝国日本の科学思想史』(勁草書房, 2018年), 127頁。
- 13) 岡田武松「中村精男先生の気象学上の貢献」(『気象集誌』第二輯, 第八巻第五号, 1930年)。
- 14) 中村精男「天気予報と暴風警報」(『東京数学物理学会学術通俗講演集』所収, 1909年)。
- 15) 『東京大学百年史』部局史三(東京大学, 1987年),

970-971頁。

- 16) 『東洋学芸雑誌』第139号, 1893年。
- 17) 『教育学術界』48(2), 1923年。
- 18) 『気象集誌』第一輯十二(1893年), 同前第一輯十三(1894年), 同前第二輯十四(1895年)。
- 19) 『官報』(大蔵省印刷局, 1902年2月12日)。
- 20) 橋本毅彦『飛行機の誕生と空気力学の形成—国家的研究開発の起源をもとめて—』(東京大学出版会, 2012年), 248頁。
- 21) 『東京物理学校同窓会会報』第十二号, 1930年, 1-3頁。
- 22) 前掲『帝国日本の科学思想史』, 127頁。

#### 注記

注1) 近藤真琴は、海軍兵学校での教育に尽力し、後に攻玉社を創立した。さらに郷里の鳥羽商船学校(鳥羽商船高等専門学校の前身)の設立にも尽力している。

注2) この時の予報は次のようであった。「午前6時 全国一般風ノ向キハ定リナシ天気ハ変リ易シ 但シ雨天勝チ」、「午後2時 変リ易キ天気ニシテ風位定ラス且雨降ル地方モアルベシ」、「午後9時 中部及ビ西部ハ晴或ハ好天気ナルベシ 北部ノ一部ハ天気定ラス 一部分ハ曇天又ハ烟霧ナルベシ」(前掲『気象百年史』, 79-80頁)。

注3) 中村精男「揺籃期の中央気象台」(『測候時報』20(11), 1953年)。なお、この文章は大正14年5月に中央気象台50周年記念に刊行された「中央気象台沿革概要」の一部を再録したものである。

注4) 明治19年から20年にかけてベルリンに滞在した当時の品川の様子に、「彼地に在て、普く各地の学校、又は工場を巡訪して、敢て獨逸式教育方法の必要を詢々唱導せり。その証跡は、当時君が遠く知人に向て、獨逸学の修業、または獨逸国の留学を勧めたりし書簡中に於て、懇篤に之を顕はせり」(前掲『品川子爵伝』, 439頁)と見える。

注5) 岡田武松「中村精男先生の気象学上の貢献」(『気象集誌』第二輯, 第八巻第五号, 1930年)。同論文は、先に掲げた以外の中村の業績と各論文の解題についても記している。

注6) 根本順吉「中村精男について」(『気象』165, 1971年)。同氏は「岡田・藤原時代の気象台の良い点の多くが中村台長の時代にはぐくまれていた」とも評価している。

#### 附記

本稿(上・下)は、令和5年度校長裁量経費による成果の一端である。なお、東京理科大学近代科学資料館には、貴重資料の閲覧ならびに資料提供において大変お世話になりました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。

附表 中村精男略年表

| 西暦（和暦）              | 主な事績  |
|---------------------|---|
| 1855年（安政2）          | 長門国萩に生まれる。  |
| 1865年頃～（元治・慶応・明治年間） | 松下村塾に通い始める（10歳頃）。<br>吉田松陰門下の馬島甫仙に師事する。漢学を学ぶ一方、理学への関心を抱く。                                    |
| 1871年（明治4）          | 上京し、築地の明治協会でフランス語を学び始める。  |
| 1872年（明治5）          | 文部省所管の南校に入学する（16歳）。<br>第一大学区第一番中学に改称される。仏語クラスに在籍して学ぶ。                                       |
| 1873年（明治6）          | 開成学校に改称される。仏語クラスに諸芸学科が設けられる。  |
| 1874年（明治7）          | 東京開成学校に改称される。仏語クラスに物理学科が設けられる。  |
| 1875年（明治8）          | ※内務省地理寮構内の東京気象台において気象観測と地震観測開始（6月1日）。   |
| 1877年（明治10）         | 東京開成学校と東京医学校が統合し、東京大学が発足する。   |
| 1879年（明治12）         | 東京大学理学部仏語物理学科を卒業する。<br>同年、内務省地理局に奉職する。  |
| 1880年（明治13）         | 東京大学理学部教授メンデンホールらと、富士山頂で最初の気象観測に従事する（8月3日～5日）。  |
| 1881年（明治14）         | 仏語物理学科の同窓生21名で、私立の夜間学校「東京物理学講習所」（現在の東京理科大学の前身）を設立する（26歳）。<br>各自の勤務後に、夜間の授業を担当する。            |
| 1883年（明治16）         | 東京物理学講習所が「東京物理学校」に改称される。<br>※東京気象台で初めての天気図作成（2月16日）、印刷発行開始（3月1日）。<br>※初めての暴風警報発表（5月16日）。    |
| 1884年（明治17）         | ※1日3回の全国天気予報発表開始（6月1日）。   |
| 1886年（明治19）         | ドイツに留学し、ベルリン大学やハンブルグの海洋気象台で気象学を研究する。  |
| 1887年（明治20）         | ※東京気象台が中央気象台に改称。  |
| 1889年（明治22）         | ドイツ留学から帰国、復職し、中央気象台技師になる。以後、気象学の論文を精力的に発表する。富士山頂に滞在し、気象観測を行う（8月1日～9月7日）。                    |
| 1892年（明治25）         | 地震研究と災害予防を目的とする「震災予防調査会」が設立され、常任委員となる。<br>同年10月、田中館愛橘、長岡半太郎、大森房吉との連名で「地震計調査第一報告」を提出する。      |
| 1893年（明治26）         | 米国シカゴの万国博覧会に、わが国の正式な気象観測の結果から気候状態を考察し英文で詳述した『The Climate of Japan』を出品する（後の『大日本風土編』の元となる論考）。 |
| 1895年（明治28）         | 第3代中央気象台長に就任する（41歳）。  |
| 1896年（明治29）         | 東京物理学校の第2代校長に就任する。  |
| 1900年（明治33）         | パリで開催された国際気象学会に参加する。  |
| 1902年（明治35）         | 『大日本風土編』（明治30年に中央気象台から刊行）により、わが国初となる気象学分野における理学博士の学位が授与される。                                 |
| 1908年（明治41）         | 帝国学士院会員に選任される。  |
| 1917年（大正6）          | 大日本気象学会会頭に就任する。   |
| 1923年（大正12）         | 中央気象台長を勇退する。  |
| 1926年（大正15）         | 財団法人日本エスペラント学会初代理事長に就任する。   |
| 1930年（昭和5）          | 逝去（1月3日、74歳）。教育者として半生を費やした東京物理学校での校葬が執り行われる（1月6日）。勲一等瑞宝章。                                   |